

堀田善衛の戦時体験

——政治への漸近、運動の痕跡

丁 世 理

キーワード…片谷大陸、拘留体験、野口務、人形劇団「ブーク」、
運動と文学

要 旨

堀田善衛を見る場合、彼の上海体験が注目されがちである。しかし、さかのぼって、戦時中における彼の体験についても、検討しなければならない。彼は自伝的小説『若き日の詩人たちの肖像』（新潮社、一九六八）に、戦時中自身の学生運動とのかわりについて、いくつかの手がかりを残している。それらの手がかりを探ってみれば、そのかわりの輪郭は姿をあらわしてくる。主として三つの面があると思う。一つは早稲田大学の左翼学生が組織した青年劇場での活動である。そこで知り合った「片谷大陸」という人物との関係が重要なポイントになる。二つめは元左翼だった従兄の「野口務」である。彼の生き方は堀田にとって一つの参照枠になっていると考えられる。三つめ

は慶應義塾大学の左翼学生と交流を持つ人形劇団「ブーク」との交わりである。そのあいだでは「マドンナ」と渾名される女性性が、橋渡的な存在として関係していた。この三つの面をつなぐものとして、謎に満ちた彼の拘留体験がある。これらの戦時体験を通じて、運動の周辺に立脚しながら、文学の道を歩む若き堀田善衛の生き方が見えてくる。

はじめに

戦後派作家のなか、とくに「国際作家」として注目されていた堀田善衛は、その文学の原点を彼の上海体験に持っている点がよく指摘される。しかし、その上海体験は如何なるものか、マクロに言えることはあっても、個々に検討せねばならないことは依然多く残っている。ましてや彼の上海体験の前段階として位置付けられる戦時中の活動にいたっては、歴史の闇に埋もれていた未知の部分は、なおさら多い。

堀田は、『若き日の詩人たちの肖像』に、一部だが、戦時中

における学生運動とのかかわりを示す手がかりを残している。

一九六六年一月から六八年五月にかけて、雑誌『文芸』に連載されていた同小説では、おおよそ慶應義塾大学法学部政治学科の予科に進学するため上京した三六年二月から、富山にある東部第四八部隊に入営した四四年二月までの八年間ほどの体験が素材になっている。慶應の仏蘭西文学科への転入をささんだこの八年間は、前後二つの時期に大別できる。後の時期に文学的交友が展開されているのに対して、前の時期には左翼学生との関係が中心になっている。先行研究では、例えば、森川達也が「堀田善衛―『若き日の詩人たちの肖像』を中心に―」（『国文学解釈と鑑賞』一九七〇年一月号）において、「氏の戦争体験の前半の契機、つまりは氏の青春の体験が、それに劣らざるまで重要な意味を持っていることが、この書を読むことによつて判明する」と評しているように、堀田の戦時体験を彼の上海体験と並列して重視する観点はあつたものの、管見のかぎり、戦時中彼はどのような体験をしていたか、その経験が彼にどのような影響を及ぼしたか、などを検討するものはない。

もちろん、小説は虚構である。しかし、自伝や自伝小説の場合には虚構とのみ言い切れないところを残す。現に後述するように、小説での手がかりから出発して、若き堀田をめぐるといふかの事実にとどりつくことが出来るからである。そういう意味からすると、『若き日の詩人たちの肖像』は、小説ではあるとしても、堀田の戦時体験を探る数少ない糸口だと言つていいだろう。一方、小説のなかで、堀田は、自身の戦時体験に容易に連結させないため、矛盾や謎を、主人公が学生運動とかかわつ

ている過程に施していることも見過ごしてはならない。どこが事実¹⁾に依拠した部分であるか、どこが堀田の細工したところであるかの線引きは難しいが、本論では、学生運動とのかかわりについて、小説から遡及しうる限りの事実を洗い出した上で、堀田の「創作」を説明しようとする試みる。

『若き日の詩人たちの肖像』の執筆期間中に、堀田は学生時代に一六回も転居を繰り返した下宿やアパートを尋ね歩いて²⁾いた。当時凋落しつつあつた堀田家の経済状況はむしろ類繁な引越しを許さなはずであつた。穿つた見方をすれば、学生時代に彼はそれほど監視され、あるいは監視を恐れていたと推測できる。なぜ彼がつけねらわれなければならなかつたのか、それが戦時中における身の処し方にどう影響を与えたのか、等々の問題を検証することは、森川の言うように、彼の戦争体験と同様に重要な意味を持つ。この時代の青春は、まぎれもなく戦争へと雪崩をうつていくなかで、どのように身を処したかという問いと深く関わっているからである。

一 「青年劇場」について

主人公が学生運動とかかわるぎつかけをもちたしたのは、「短歌文芸学」（登場人物の呼び名）という左翼学生である。彼は「マルクス主義からする文芸学」というものを勉強し、久保菜を尊敬している。彼を中心に、左翼学生らは「青年劇場」をこしらえ、築地小劇場で芝居を上演している。絶望と憂鬱に陥っていた主人公は、「短歌文芸学」の誘いに応じて、『ヴォルポーヌ』の伴奏を担当し、新協劇団での公演も手伝つたが、ほ

どなくして「短歌文芸学」は横拳され、最後に結核を患って、絶望のなか入水自殺してしまった。

「青年劇場」という実在の劇団を手がかりにして、『特高月報』や早稲田大学演劇博物館所蔵の演劇資料等を照合すれば、「短歌文芸学」は実際誰であるか、堀田はそれと如何なる関係にあったかは、一部わかるのである。

「青年劇場」の活動について、一九四〇年二月の『特高月報』に次のような記載がある。

青年劇場は早稲田大学学生を中心として昭和十三年一月月創立せられたる学生演劇団体にして、昭和十四年一月及び六月の二回に亙る公演に於いてもその脚本内容中左翼的不穏当なる台詞ありて削除せられたる等相当活発なる活動ありたるが、その後（中略）創立委員にして現在責任者たる土屋知行事土屋達一郎（早大政経科卒業）中心となり（中略）来る六月第三回公演を開催すべく三月八日（中略）第一回総会を開催せり。協議事項の中公演劇場を築地小劇場に、出し物を島木健作「生活の探求」に選定し、土屋達一郎、片谷大陸両名にて脚色することとし、（中略）中心人物中傾向容疑の者ありて動向相当注意を要するものと認めらる々状況なり。

小さな素人劇団の動向を特別高等警察（特高）がここまで詳細に追跡していることに驚愕させられるが、この調査によれば、「青年劇場」は「土屋達一郎」と「片谷大陸」を中心とした早大生による学生演劇団体であり、一九三八年一月の創立から四〇年二月まで、二回の公演を実施した。二回の公演ともに、

脚本に「左翼的不穏当なる」セリフがあったとしてにらまれていたのである。その二回の公演記録は早稲田大学演劇博物館デジタル・アーカイブ・コレクションで閲覧できるので、以下そのデータに基づいて公演記録を簡潔に紹介する。

第一回の公演は、「土屋達一郎」の演出のもとで三九年一月二三日から二五日まで築地小劇場において、阿部知二作の『幸福』が上演された。演出責任者の土屋達一郎の助手を務め、第三回公演台本脚色の予定担当者にもなっている「片谷峻哉」という人物の記録も残っている。

第二回の公演は、ベン・ジョンソン作、ジュール・マロン翻案、長谷川善雄訳の『ヴォルボヌ』であった。「片谷峻哉」の演出で三九年六月九日から一日まで同じく築地小劇場において上演されていた。音楽選曲の担当者は「堀田義江」であり、演出の助手を務めたのは「土屋知行」である。前出『特高月報』では、「土屋知行」はすなわち「土屋達一郎」である。

公演記録では「土屋達一郎」と「片谷峻哉」の二人が中心人物になっているのに対して、前掲『特高月報』においては、「土屋達一郎」と「片谷大陸」の二人が中心人物だと書かれている。「土屋達一郎」が土屋知行と同一人物であると同じように、「片谷峻哉」も「片谷大陸」の変名だと考えられる。現に一九四〇年二月の『特高月報』に、「片谷峻哉」と「片谷大陸（左翼運動前歴者）」と明示してある。

『近代日本社会運動史人物大事典』（日外アソシエーツ株式会社、一九九七）では、片谷大陸は三九年六月二七日、早大内共産主義グループの一員として検挙され、戦後は劇団民藝の専務

や新劇団協議会常任理事等を務めたとある。七三年十一月号の雑誌『悲劇喜劇』（早川書房）に片谷大陸の回想——「再開・追憶」が載っている。そこに堀田とのかかわりについては、以下のような言及がある。

私は浪人生活を三年間で打ち切り、早稲田の学生になった。この間に御多分にもれず築地小劇場の引力のとりこになつていた。それから、堀田善衛氏の『若き日の詩人たちの象徴』の一部分へつながりもする（迂かつなことに、このことを私は最近になって、堀田氏自身から「あんたも登場しているよ」と知らされた）のだが、学部へ進んだ六月に私は警察のごやつかいになって、冬まで放り込まれていた。昭和十四年のことである。（中略）私は翌年一月に釈放されると直ぐ、六月に予定された公演のため小説の脚色にかかった。島木健作の「生活の探求」で、劇団は学内で創立し、その後学内外にこだわらぬ編成となつた青年劇場というもので、築地小劇場で三回目の公演であつた。

たしかに、四〇年七月の『特高月報』を見ると、当時早大文学部一年の片谷は、前年六月二七日、早大校内共産主義グループ関係で検挙された。遡つて三九年四月の『特高月報』の「唯物研究会を中心とする左翼学生運動の状況」では、早稲田大学内の未検挙者として片谷の名前が挙げられている。

上掲片谷の証言は、『特高月報』の記録や「青年劇場」二回公演の記録とも符合しているので、信憑性が高いと思う。その証言では、堀田が戦時中に「青年劇場」にかかわつたと明言しているのので、「青年劇場」第二回の公演記録での音楽選曲の担当

者——「堀田義江」は「堀田善衛」とみて恐らく間違いない。となれば、『ヴォルポーヌ』の伴奏をしたということも、堀田自身の体験によるものであろう。

以上を踏まえてみれば、堀田は、少なくとも三九年四月以降から特高のブラックリストに載つていた片谷との交流を契機に、唯物研究会（唯研）の末端組織なる「青年劇場」に関わりをもつたと言える。『日本近代文学館資料叢書（二）』（日本近代文学館編、博文館新社、二〇〇七）に収められている四〇年七月二九日消印の芥川比呂志宛の堀田書簡に、「その他九月に入りますと又青年劇場の仕事が出て来ることと思います」との文言があることから、「青年劇場」での堀田の活動は少なくとも四〇年七月末までは継続したとわかる。第二回の公演から計算しても一年ほど「青年劇場」に関わり続けていた。二回目公演終了（三九年六月一日）してからわずか一六日後に片谷が検挙され、その検挙期間が七か月に及んだことは、当然ながら堀田も知悉していたはずである。換言すれば、三九年六月から四〇年七月までの期間にわたつて、堀田は「青年劇場」での活動を通して、片谷の属する早大内共産主義グループに、少なくとも協力的・同伴的な立場であつた。

二 拘禁の謎

「青年劇場」に対する検挙で、片谷らの左翼学生とかかわりを持ち続けた堀田が芋蔓式で警察に連行されてもおかしくないはずだが、小説のなかでは、なぜか主人公の拘禁は、「短歌文芸学」と出会う以前の段階に設定されている。主人公の拘禁を

めぐる前後の出来事を時系列に即して整理すれば、以下のようになる。

淀橋署に入れられた直後に、牢名主の話として「人民戦線のな、第二次検挙で来てもう三か月ほどここに居る帝大の先生とか、それからこの筋向いにやな、芝居の赤い奴もいるんだ」がある。主人公は「イガ栗頭の著名な劇作家にはったり出会って」、自分も「同種類の者として扱われているのだとしたら、と思わないわけに行かなかった」。そして「シナ人」の女が叫ぶ「日本帝国主義の莫迦野郎」を耳にした。

留置場での十三日目、釈放。その後、すぐ映画館に入って、『舞踏会の手帖』（小説での叙述から推測を鑑賞。映画の終わりに「満州国皇帝陛下御来朝遊ばさる」というニュース映画が上映。映画館を出てからは、次の一連の出来事が並べられている――フランコ政権の日独伊防共協定参加、青年劇場での手伝い、天津で英国租界の封鎖、ヨーロッパで戦争勃発、「短歌文芸会」の検挙、主人公の転居。

最後に、三か月に及ぶ放浪の旅に出た主人公は、東京に戻った時、「新築地・新協の両左翼劇団が解散命令をくらった、主だった連中は、久保菜も村山知義も滝沢修も、みなつかまった」。

これほど歴史事件をとどころに取り入れているのは、堀田が時系列を正確に調べたうえ、小説の執筆を進めていたのを物語っている。そのため、人民戦線の第二次検挙（三八年二月）、『舞踏会の手帖』（日本での初公開三八年六月）、フランコ政権の日独伊防共協定参加（三九年三月）、天津での英国租界の封鎖（三九年六月）、ヨーロッパでの戦争（三九年九月）など、一

連の出来事は時間順に配置されている。しかし、「満州国皇帝陛下御来朝遊ばさる」だけはその時間順を狂わせてしまう。満州国皇帝溥儀の訪日は、三五年四月と四〇年六月二六日から七月六日までの二回しかないからである。どちらにしても、一連の出来事のなかに繰り返すことができないはずである。

とはいえ、「日本帝国主義の莫迦野郎」と叫ぶ「シナ人」の女は溥儀の最初の訪日と関係がある。「私はもう中国を語らない」（武田泰淳・堀田善衛、朝日新聞社、一九七三）において、堀田は次のような一節を語った。

謝冰瑩の書いた『在日本獄中』というものに、変名だが武田さんが出てきますね。戦後読んだことがありますよ。（中略）それから謝冰瑩さんと武田さんの二人が目黒署の留置場に入れられていた。その時に謝冰瑩さんは「日本帝国主義のバカヤロー」と毎日どなっていたという。（中略）それは満州国皇帝陛下の来日の予防拘禁なんだね。その時、おれもつかまつっちゃった。何のためにつかまえられたのか、ぜんぜんわからないんでね。あれは一九三九年くらいでしたか。

武田泰淳は「謝冰瑩事件」（『中国文学』一〇一号、一九四七年一月）において、三五年の五月前、謝冰瑩とともに目黒署に拘留されたことを詳しく書いている。謝冰瑩作『在日本獄中』を読む限りでは、留置場内で「日本帝国主義の莫迦野郎」を叫ぶような文言は見当たらないが、三五年四月一四日夜、目黒署で拘留され、獄中で武田泰淳と思われる人物に逢ったとの記述がある。武田泰淳と謝冰瑩の回想からみれば、両氏の拘留は溥

儀の第一次訪日（三五年四月）に発端するものだとわかる。だから堀田の「その時、おれもつかまつっちゃった」という発言は完全な記憶違いである。なぜなら、堀田が慶應義塾大学に入學すべく上京したのは一九三六年二月。小説の冒頭が二・二六事件の日という大變劇的に始まるゆえんもそこにある。したがって、三五年に堀田が東京にいるはずはなく、溥儀の第一次訪日とも関係はない。だとすれば、「日本帝国主義の莫迦野郎」を叫ぶ「シナ人」の女に逢ったという主人公の拘留所内での見聞も武田泰淳の体験を移植したものと推測できる。

そうすると、溥儀の二回目（四〇年六月二六日——七月六日）の訪日のために予防拘禁された可能性が高くなる。上述した通り、堀田は少なくとも四〇年七月まで「青年劇場」とかかわっていたので、左翼前歴者の片谷の線を通して、堀田にも特高からの追及が来たとも充分考えられるからである。仮に「青年劇場」での活動を特高に警戒されていたため、溥儀の第二次訪日の予防拘禁を機に一時つかまつたということ、そのまま主人公に当てはめれば、拘留所のなかで「著名な劇作家にばったり出会った」こと、「同種類の者として扱われているのだとしたら、と思わないわけに行かなかつた」こと、そして「新築地・新協の両左翼劇団が解散命令をくらい、主だった連中は、久保栄も村山知義も滝沢修も、みなつかまつってしまった」こと、などのくんだりは時系列的に連続したものになる。

しかし、前述したとおり、主人公の拘禁はそもそも「短歌文芸学」ら「青年劇場」に集う左翼学生と知り合う以前のことである。仮に拘禁の理由を溥儀の二度目の訪日にしても、第二次

人民戦線事件によって検挙された学者たちが三ヶ月も収監されているという小説中の時間設定（三八年五月から六月ころ）がズレてしまう。短くても一年、悪くすれば丸二年も離れている。結局その拘禁事件は、溥儀の第二次訪日前の予防拘禁、並びに武田泰淳・謝冰瑩体験記と新築地・新協の両左翼劇団弾圧事件のいずれにも絡み合うことになるが、時系列的には、小説中の各出来事の間整合性が緊密に取れていない。

そのようになつたのは、恐らく堀田が主人公の拘禁を「短歌文芸学」ら左翼学生とのかかわりに結びつけず、かわりに溥儀の訪日にすりかえようとしつつ、主人公が左翼の演劇関係者でもあるような書き方をしたからではないかと思う。結果として、主人公の拘禁は謎に包まれることになった。

その謎の形成は、当然堀田の記憶違いあるいは失念のもたらした側面も無きにしてもあらずだが、拘禁前後の歴史事実を時間順にちりばめているところから見た創作時の緻密さに鑑みれば、主人公の拘禁を「短歌文芸学」の検挙と書き分けたのは、片谷らの左翼学生に対して、堀田は青年時代の自身に「引け目」を感じていたからではないかと思う。というのは、日中戦争以後の三十年代後半から四十年代初頭にかけて、国内の締め付けは強化の一途をたどり、取り締まりの触手があらゆるところに伸びていた。そのような社会・時代において、左翼の学生運動の底辺或いは周縁にいたと思われる当時の堀田は相当敏感に反応し、運動から離脱していったのではないか。

最後に無慙な自死を遂げた「短歌文芸学」と比べて、主人公は転々と下宿やアパートを引っ越して、あげくに東京を留守に

して三か月に及ぶ放浪の旅に出た。主人公の行動は、普通に考
えれば、軟弱・逃亡と思われても仕方がないが、いたずらに死
を選ばずに生きて証言を残す方に彼は傾いていく。そのため
か、学生運動に対して不即不離の立場を示している主人公の表
象が生成されたのである。

いずれにせよ、堀田は淀橋署につかまった。『わが文学、わ
が昭和史』(筑摩書房、一九七三)で、堀田は「ほくが淀橋署に
つかまったときに、(中略)何かでとっつかまった、二度目だ
けど、三週間ぐらいで、わけがわからないままほうり出された
覚えがある」と語った。注目すべきは「二度目」とあることで
ある。小説では鉄格子のなかに入れられたのは一度だけであ
る。この圧縮が三八年と四〇年の出来事がひとつながりのよう
に滑らかに書かれているという問題にもつながっている。どち
らもなぜつかまったのか、本人にも分からない以上、その理由
は依然として謎のベールに包まれたままである。

三 「従兄」と転向

主人公の生き方に大きな影響を与えた人物として、彼の身边
にいた「従兄」も重要である。「従兄」は、プロレタリア運動に
身を投じていた人物だが、ついに「短歌文芸学」のように身を
殉ずることなく、転向か偽装転向かはつきりせず、秘密裡に左
翼のシンパとして行動している。

この「従兄」は「日本共産党の関西関係の、かなり重要な
ポストにいた」が、早くに逮捕、拘留された。元内務省警保局
長である父親を亡くしていた「従兄」は、主人公の父母が「旧

知の政治家や警察や司法関係の高官に懇願して、正式の下獄を
免れた」。転向した「従兄」は「警視庁につとめることを条件に
して釈放」され、ほどなくして職業野球の会社に入った。その
「職業野球の社長は、Y新聞の社長でもあり、この社長は巡查
出身であった。そして社長は、従兄の亡父が内務省警保局長で
あったときの部下であった」。

小説での「従兄」は、そのまま実生活における堀田の従兄を
モデルにしている。従兄の亡父について、堀田は「奇妙な一族
の記録」(『文芸春秋』一九五六年六月号)においてその本名を
明かしている。

父のいた野口一族に、大正の中期に警視庁の警務部長を
やり、朝鮮総督府の警務局長に赴任する直前に急死した野
口淳吉氏もあり、この野口氏の直属の部下に、正力松太郎
氏がいた。

国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵の公開資料「正五
位野口淳吉叙勲ノ件」(Ref:A10112870800)では、野口淳吉は
一九〇六年に東京帝国大学法科大学を卒業して以降、各県での
警察勤務を経て、一六年に警視庁警務部長に昇進、一九年に朝
鮮総督府警務局長に任命されたところ、赴任の途中で病に
倒れてなくなったとある。『越中百家(下)』(富山新聞社編、
一九七四)の堀田家略系図では、野口淳吉は陸軍少将野口詮太
郎と堀田の父親堀田勝文と三人兄弟をなしている。つまり、野
口淳吉は堀田の伯父に当たる。

従兄の名前は、『正力松太郎伝記』(御手洗辰雄、大日本雄弁
会講談社、一九五五)に出ている。

大正八年は正力にとって一つの、運命の年であった。それは、同郷の先輩であり、同時に警視庁入り以来の上司であった警務部長野口淳吉の急死である。(中略)野口の長男務は今、正力の下に日本野球連盟専務理事として働いている。

さらに、一九八三年一月三一日付の『北日本新聞』コラム「やま人物風土記」に、野口務の略歴は以下のように紹介されている。

昭和九年六月、巨人軍の母体・株式会社大日本東京野球倶楽部を故正力松太郎が設立。この時、野口は正力の世話になり、同倶楽部へ入る。事務所を切り盛りする。以来、戦前の職業野球、戦後のプロ野球とともに歩む。昭和十五年から三年間、巨人軍代表も務め、今、プロ野球の創設期から今日まで舞台裏を語れる唯一の証人である。(中略)京大時代、左翼運動に身を投じ、何度か特高の世話に。作家・堀田善衛はいとこ。小説「若き日の詩人たちの肖像」にも登場。

以上の資料を照合すれば、堀田は自身の従兄なる野口務を小説の「従兄」に当てていることは明白である。野口の学生運動歴は、『京都帝国大学学生運動史』(京都帝国大学学生運動史刊行会、昭和堂、一九八四)に詳しい。河上肇を指導者とする京都大学社会科学研究会(SS)に対する当局からの弾圧に抵抗して、宇都宮徳馬らと共に、その再建幹部の一人として運動を展開した野口は、一九三三年六月五日、同六月二一日、同七月五日の『京都帝国大学新聞』に「一九二八年以後の京大学生運動

思い出」を連載し、運動の概略を次のように振り返った。

左翼学生運動は単なる学生だけの学生のために学生運動と云ふものではなく、すべての学内の組織はプロレタリアの組織に従属すべきであり、学生運動の本質は青年運動であるので、共産青年同盟の指導下に立つべきで、(中略)京大SSもこの方針に由り日本共産主義者運動の発達の歴史を検討し学生運動を再認識し、日和見主義と戦ひ、SSの成員は次第に非合法生活に移った。かくて二八年四月十八日に解散を命ぜられながら断固としてその組織を維持した京大社会科学研究会は、創立以来の輝ける歴史を自らと閉じた。

碎けて言えば、野口は最終的に当時非合法とされた日本共産党に入ったため、検挙されたのである。一九二八年のコミンテルン第六回大会で、それまでの統一戦線戦術は一変して、前衛党主義へと路線変更した。それに引きずられた形で、当時の日本共産党は極左的武装闘争や合法無産政党解消運動を展開するいわゆる「武装共産党」時代に突入していった。コミンテルンに翻弄される日本共産党の運動方針の急転によって、その系列にあった学生運動組織も大きく方向転換していき、結果として野口は一九三〇年に逮捕され、転向を余儀なくされたのである。それ以後は、前述のとおり、正力松太郎のもとで野球畑を歩むことになった。

しかし、野口は転向の後も左翼シンパとして行動していたようである。前出『近代日本社会運動史人物大事典』の「奥村秀松」の項目に「三六年六月、和田四三四、宮本喜久雄、藤井英男ら

と日本共産党中央再建準備委員会を結成、技術部長となる。同委員会は八月に『赤旗』を復刊し(中略)検査される直前、八月一日に上京して菊正ビルの巨人軍事務所に野口を訪ね、食事をもにしたことが野口の日記に記されて「いるとある。

小説のなかでも、「従兄」は、実は偽装転向していると主人公が考えている。前述した主人公の拘留において、警察に連れて行かれる途中での回想として、「従兄」から一九三六年八月一日付の『赤旗』を預かったというエピソードが記されている。さらに、主人公は釈放されたのち、行きつけのバーで左翼関係者の秘密会合に「従兄」を発見した。その秘密会合に出席した共産党員について、次のような感想も書かれている。

男が、拷問に拷問をかさねられたことは、それはもう明白であった。そんな目に自分が遭ったとしたら、男の千分の一も耐えられないであろうことも見えていた。けれども、その結果のことを、あんな下卑なはやり唄に托して自分自身に対して言うという、そこまでの頹廢が、どうにも我慢がならなかった。(中略)自分でぶちこわしては駄目なのだ。自分でぶちこわしさえしなければ、雄々しさというもののかげつぱしでもがのこつてくれて、そこから、党などというどこにいてもわからぬものはまずどうでもいいとしても、せめてあの男の間人だけでも救われるじゃないか

弾圧に対する真正面からの抵抗は尊敬に値するが、保身も重要だと主人公は言っている。「従兄」はそういう風に「転向」した。絶望と憂鬱につかる主人公は「短歌文芸学」の誘いに応じ

たけれども、「短歌文芸学」が検査された後、下宿やアパートを転々としたうえ、ついに東京での学生狩りをかわすため、三か月の間、放浪の旅に出た。要するに、「短歌文芸学」らの運動から實際身を引いてしまつて、「転向」したのである。主人公の拘禁は謎に満ちているが、「転向」とは不可分の関係にあるのが確かである。青年劇場での活動や、實際の拘留経験、並びに野口務の転向を、小説での言説と対応させれば、主人公の「転向」は堀田自身の体験を取り込んだものと見ても、あながち間違いではないだろう。

戦時中の身の処し方を振り返つた堀田の未発表資料に、「私は十代、二十代のある時期——時代的に言えば満州事変、日華事変、太平洋戦争などの、事件が起こり、それによつて、手ひどい打撃を蒙らせられた、あの時期と同じような状態、その一層深まつた状態を今日の自分とその周囲に感ずるからである。しかもこの打撃に対して、強力な反撃の手段を何一つ持たぬことも同じであり、またせめて自分の精神の頭だけでも、上げて歩くために、物を書くことによつて、自己の内外を検討する、この内省的な方法しかないこともあのころと同じやうに思われる」との文章がある。この一文から、堀田の「転向」は、運動から撤退して、物書きにシフトすることを意味するものとわかる。戦時中発表された評論『西行』において、彼は自身の「転向」についての考え方を、出家した西行の生き方を通して表現しようと試みていた。西行の生きざまから見出した「自然の天性、己れの生に即しての信」に凝縮される命に対する見方は、まさに「転向」後に堀田がたどり着いた心境ではないか

と思える。

それと近い考え方は、敗戦から一年後に発表された野間宏の『暗い絵』（真善美社、一九四七）にも見つか。同小説の主人公は、非転向を貫いた運動仲間の獄死を知った際、相手の行動に心と体をゆすられる思いを覚えている一方、検挙され、転向・出獄し、生活費を得るため軍需会社に勤めた自身の行動が間違っていたとは考えていない。

四 転向以後

主人公の拘禁をめぐる謎以外、主人公の人間関係における多くの空白もある。前出の唯研の傘下組織には、片谷など早稲田大学生のグループと並んで、慶應義塾大学生のグループも存在していた。それとの関係について、小説の中では手がかりがあまり記されなかった。

一九三九年一月の『特高月報』に掲載されている「慶大左翼組織図表」に以下のような組織関係が示されている。

唯研↓沼田秀郷↓竹山尚・内藤一雄↓非合法共產主義グループ（最高指導部）↓日本経済事情研究会（松沢元典）↓竹山尚↓史的唯物論研究会（昭和十三年六月より三回）、会員竹山尚、久保憲三（簡易保険局）、川尻泰司（人形工房）、梅原某（職工）、新チャン（職工）

いかに当時の公安組織が細かい人間関係まで把握していたか、その監視の徹底ぶりにやはり驚かされるが、この組織図表に注目したいのは、川尻泰司などの「人形劇団ブーク」の関係者も組み込まれていることである。

「ブーク」について、小説のなかでも実名で出されており、しかも主人公がひそかに恋慕している相手の「マドンナ」も「ブーク」の関係者である。彼女は「新劇に属していたことがあって二度ほどは検挙された」といい、「ブーク」にいたころ、「装置を担当していた画家の夫とはそこで結ばれた」のである。

川尻泰司編『現代人形劇創造の半世紀…人形劇団ブーク五五年の歩み』（未來社、一九八四）によれば、敗戦までのブークの活動はおおむね次のとおりである。一九二九年二月、人形クラブ = LA PUPA KLUBO は、プロレタリア美術同盟員の川尻東次のもとで活動をはじめ、ナップ（全日本無産者芸術連盟）やプロット（日本プロレタリア演劇連盟）の協力を得ながら、計四回公演を行った。三二年一二月創始者の川尻東次が逝去すると、弟の川尻泰司が責任者となり、紆余曲折の後、人形劇団ユナー・ブーポを立ち上げた。日中戦争以降は慶應義塾大学内の日本経済研究会と連絡を持っている久保憲三と共同研究会をはじめ、日本経済研究会のリーダーなる松沢元典との接触を契機に、人形工房を作った。しかし、唯研の線で慶應の日本経済研究会に捜査の手が伸び、松沢は検挙され、四〇年一月に人形工房も全員あげられたのである。

一九四〇年一月の『特高月報』の「ユナー・ブーポ劇団関係者の検挙」にも、「史的唯物論」その他をテキストとして秘密研究会を開催したとして、川尻泰司、川尻錦子、中江良介、雨宮壽美枝、榊原慎三の五人が逮捕されたことが記録されている。

『人形劇団ブーク五五年の歩み』と『特高月報』を見た限りでは、戦前・戦時中のブーク構成メンバーのうち、検挙された女

性は川尻錦子と兩宮壽美枝の二人だけである。二人のうち、川尻錦子は後に画家の戸井昌造に嫁したことに鑑みれば、川尻錦子が「マドンナ」のモデルになると推測できる。

堀田が直接慶應内の共產主義グループと関係があつたかは不明だが、片谷ら早大生と慶大生が唯研を介してつながっていることは事実である。一九三九年一月の『特高月報』では、「沼田秀郷を主動とし、東京商大、東大、早大、農大、慶大、法大、東京外語、東京高校、東京美術、松本高校の各校左翼学生に連絡し、更に其の触手を関西に迄延し、之等を指導し学内に非法グループを結成せしむる等其の他各様に学内運動を展開せしめ、一面運動の統一の爲客年八月上旬東大、早大、東京商大、東京外語、松本高校の五校代表者を以て第一回連絡会議を開催し、之をインターカレッジと称し、引続き学生運動の發展拡大を期し居たるものなり」とあるからである。

慶大グループは早大グループと共に「インターカレッジ」に入っているのでお互いに協力関係にあつた。一年も「青年劇場」に参加していた堀田は片谷らの早大グループと交渉を持ったからには、組織間のつながりで、慶大グループの存在を知っていた、若しくはそこに関与したのは当然の成り行きではないか。或いは最初から慶大グループを通して、片谷らの早大グループと接点を持ったのかも知れない。

一九三八年一月の『特高月報』によれば、慶大グループに對する検査が同月に実施された。三九年四月と七月の『特高月報』では、いわゆる「インターカレッジ」に加盟した各大学の学生組織に對する弾圧が二回行われた。このため、組織的な学

生運動の団体が壊滅状態に追い込まれた。この間の出来事について、小説のなかでは、「短歌文芸学」らの活動・検査への言及があるものの、慶大校内の学生グループへの言及がほぼない。わずかに小説の末尾に、前出の日本經濟事情研究会から派生した「丘友会」というもう一つの慶大校内左翼組織が一回だけ登場したのである。慶應学内の左翼学生との関係がまったく前面に出されなかったために、主人公の「短歌文芸学」や「マドンナ」との付き合いに多くの空白が生じている。その空白がゆえ、拘禁の謎は一層端倪すべからざるものとなった。本多秋五が「解説 青春自伝長篇についてのノート」(『堀田善衛全集』(九)、筑摩書房、一九七五)に、「主人公が淀橋署に検査されるところがわかりにくい。「短歌文芸学」なる左翼青年との付き合いがわかりにくい。主人公とマルクス主義の関係がよくわからないと思つた。しかし、従兄の存在を新しい角度から見直すと、わからなくもない。「マドンナ」は多くの部分が語られずに残されている、と同時に多くの加工が施されている人物」云々と書いた所以も、堀田が、唯研でつながっている早大と慶大の両グループと主人公との具体的な関係にほとんど触れなかったところにあると思える。

とはいえ、小説において、慶大の左翼学生との関係を思わせる箇所は皆無というわけでもない。主人公は、「山田喜太郎」という仏文科の同級生で左翼の学生でもある人物とのやり取りを通して、間接的に左翼活動とかわりを保ち続けた。「山田喜太郎」は仏文科の学生のなかで、「マルクス、エンゲルスの芸術論を語るたつた一人の人であった。未決監でようやく出て

きたのに、やはり読書会のようなものを組織しようとした」。彼はその組織に加わらなかつたが、「山田喜太郎」から託された手紙を大岡山に住む某共産党幹部に送り届けた。結局「山田喜太郎」は一九四三年一〇月に横浜事件にひつかり、逮捕されたのである。

この「山田喜太郎」の原型について、堀田は『戦後派作家は語る』（古林尚、筑摩書房、一九七二）において、横浜事件で獄死した和田喜太郎だと明かしている。そして『わが文学・わが昭和史』に、「大岡山に住む某共産党幹部」を、のちにスパイとして指弾される伊藤律とし、自身も危うくゾルゲ事件に巻き込まれそうだったと言っている。なお、伊藤律の次男である伊藤淳が堀田の小説における「大岡山」云々の記述をその母親、つまり伊藤律の妻に確認したところ、「そうねえ、そんなことがあったわねえ」との回答があったという。¹⁰

山田喜太郎や伊藤律とのかかわりは、どの程度のものであったのかははっきりしないが、いずれにせよ、一九四〇年一月末、「青年劇場」が解散に追い込まれた後、活動の場を失った堀田は単独で左翼活動に継続的に関与していたと言える。

終りに

堀田は「私の創作体験」（『乱世の文学者』、未来社、一九五八）において、「昭和でいえば十二、十三ごろ、つまり私が大学に入ってからくらいだと思う。（中略）思想ないし思想運動というものを全然信じない、そういうものを文学、芸術から排除してゆきたいという考えが私自身の文学の仕事を始める

幼年期に一つあった」と書いている。

しかし、これまでの検討に基づいてみると、戦前・戦時中は、必ずしも思想ないし思想運動を信じていなかったとは見えない。短く見積もっても、三九年六月から四〇年七月までの一年間ほど、片谷などの早大左翼学生の主導した「青年劇場」で活動していた。「左翼前歴者」と特高にマークされた片谷との交友は単なる演劇仲間とは到底考えられない。堀田の拘禁は、理由がいまだに判然としないが、片谷や「青年劇場」と深いかわりがあったはずである。そして川尻錦子ら「ブーク」関係者の存在は、いわゆる慶應大学内の共産主義グループと彼との関係を暗示したものだと思える。「青年劇場」が解散させられた後、同級生の共産主義者である和田喜太郎や伊藤律とのかかわりも、その関係をほのめかしているのではないか。踏み込んでいうと、片谷や川尻らとの交友を通じて、唯研の学生組織のネットワークに、彼は組み込まれていたと考えられる。野口務は、片谷や川尻を網羅した学生組織のネットワークの外延にあったのである。一九〇七年生まれの野口務は、一八年生まれの堀田と実に一一歳の年齢差もある。同世代でない二人をつなぐ位置にあったのは、野口務の実弟野口清である。戦後高岡市の助役を務めていた野口清は、学生時代に兄の影響でマルクス主義に一時共感したことがあったといい、同い年で同級生の堀田とは小さい頃から仲がよく、同じ年に上京して、早稲田大学政経学部に進んだのである。¹¹

一方、堀田は運動に深くかかわったかと言えば、素直に頷けないところもある。『特高月報』に活動の痕跡を残した片谷な

どに比べれば、軽微なものと云わざるを得ない。それにしても、慶応学内の左翼学生との交差について、彼は僅かな部分しか触れていない。それだけ運動から距離を置くようになった時、彼の受けた衝撃が大きかっただろう。猛烈な弾圧の下で、なお行動の面で抵抗を続ける人は少数派のはずで、大多数の人は大勢になびくものである。少数派と大多数の間に、「転向」しながらも、かかわりを断絶することのなかった野口や堀田のような人々も存在する。所信を貫くことと身を守ることを両立させようとした野口の生き方を身近で観察した堀田は、自身の生き方を、転向か非転向のような単純明快のものとして立てず、運動と文学の両方に関わらせただけではないかと思える。彼は、戦争末期の評論『西行』において、天皇への限らない愛情を覚える西行像を作り出す一方、「支那事変前後三十数年の憂鬱は史上に稀である」と悲惨な現実から目をそらすこともなかった。それは一つの水脈として、上海体験を経て、『広場の孤独』（中央公論社、一九五一）に代表される堀田の戦後作品やアジア・アフリカ作家会議での活動などへと流れていくのである。

注(1) 「私の引つ越し東京地図」(『文芸春秋』、一九六六年六月)を参照。

(2) 『特高月報』(内務省警保局保安課) 復刻版(政経出版社、一九七三年)を参照。以下同じ。

(3) 一九三八年十一月の『特高月報』によれば、唯物研究会とは、三年六月「岡邦雄、戸坂潤ら当時直接若しくは間接に日本共産党と関連を有したる共産主義学者者を中心となり、「現実

的諸課題より遊離することなく、自然科学社会学及哲学に於ける唯物論を研究し其啓蒙に資すること」を目的として結成されたものであり、三七年一月日本無産党および労農派の一言検挙を受けて、翌年の一月に急ぎよ解散を声明したものの、有志は労働者或いは学生の指導にあたり続けたという。

(4) 東洋文庫所蔵、華北新聞社出版部、一九四三。同書において、女兵をしたことや、満州事変の際、留学中を日本政府に国外追放されたこと、三五年二度目の日本留学中を満洲国皇帝訪日のため、検挙されたこと、国民党要人の柳亜子が外交ルートを通じて謝氏を救い出したことなどが書かれている。

(5) 前出奥村秀松らの日本共産党中央再建準備委員会(元日本共産党本部の発行になる『赤旗』は第一八七号(一九三五年二月二〇日)が最終号)。

(6) 神奈川近代文学館所蔵、請求記号：7/H04/110/00083254。冒頭欠のため、二頁目最初の一句「：で以来、日記を書かなくなつて：」を以て名前が付けられている。執筆は一九五一年と推定されている。

(7) 雑誌『批評』において全五回連載、第一回「伝説」(一九四三年一月)、第二回「出家」(翌年一月)、第三・四回「原高貴性」(同年二月と四月)、第五回「崇徳院」(同年一月)。

(8) 『近代日本社会運動史人物大事典』に川尻錦子は戸井錦子の旧名として記されている。『美術家索引・日本東洋篇』(恵光院白編、日外アソシエーツ、一九九二)に戸井昌造の妻は戸井錦子と明記。なお、『戦争案内』(戸井昌造、平凡社、一九九九)に戸井昌造は「劇団ブークなどで民主主義的芸術・文化活動に従事したのち、いつくかの職業を経て、画業に専

心する」とある。

(9) 一九四二年二月の『特高月報』を参照。

(10) 『父・伊藤律―ある家族の「戦後」』(伊藤淳、講談社、二〇一六年)を参照。

(11) 『一本の道はるかにて』(野口清自費出版、一九八三年、富山県立図書館所蔵)。

〔付記〕

本稿を草するにあたり、堀田百合子氏及び神奈川近代文学館から、堀田善衛の未発表草稿の引用について、格別のご高配を賜りましたことを感謝申し上げます。

(てい せり、本学大学院博士後期課程)